

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

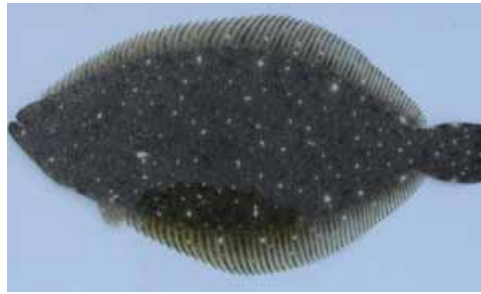
[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

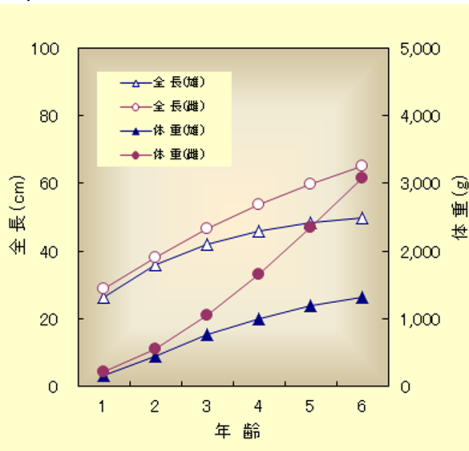
系群名 日本海北・中部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 15歳程度
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 春～夏季(3～7月)、水深50m以浅
索餌期・索餌場: 青森県津軽半島西岸から兵庫県沿岸の水深150m以浅
食性: 着底後はアミ類など、全長10cm以上では魚類が主食、他にはイカ類、エビ類等
捕食者: 稚魚期にはより大型のヒラメをはじめマゴチ、オニオコゼ、アナハゼ、イシガニ、エビジャコ等

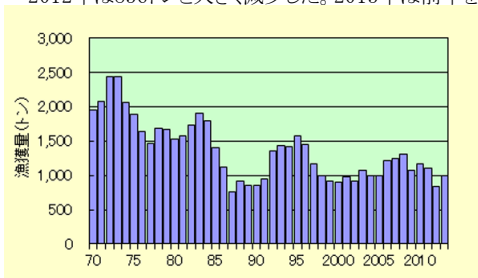


漁業の特徴

本種は沿岸漁業の重要な対象種で、栽培漁業の代表的対象種でもあり、1980年前後より分布海域において種苗の放流が行われている。主に刺網、定置網、底びき網などで漁獲されている。

漁獲の動向

1970年以降における漁獲量は、10数年周期で増減を繰り返しながらも、全体としては減少傾向にある。近年の漁獲量は2008年をピークとして、2009年は1,068トンと急減した。2010年は前年を108トン上回る1,176トンであったが、2012年は836トンと大きく減少した。2013年は前年を155トン上回り、992トンであった。



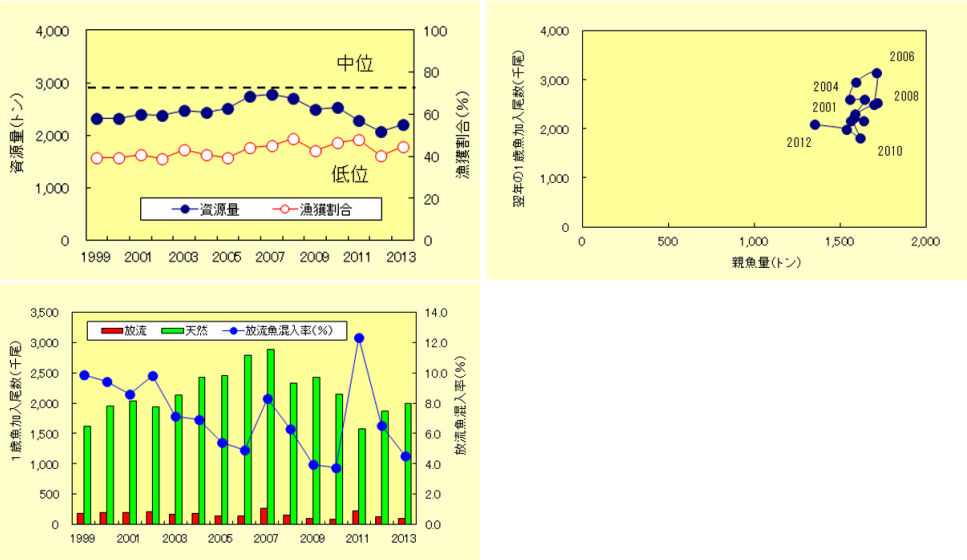
資源評価法

1999～2013年の年齢別漁獲尾数データを使用してコホート解析を行った。自然死亡係数は、安達(2007)に従い0.2とした。5歳以上をプラスグループとし、4歳魚と5歳以上魚の漁獲係数は等しいと仮定した。2013年の1～4歳魚の漁獲係数には各年齢の過去3年間(2010～2012年)の平均値を用いた。

資源状態

資源量は1999年以降2010年までは2,300～2,800トンの間を推移してきたが、2007年以降、減少傾向にあった。2013年は前年よりも増加し、2,214トンと推定された。親魚量は、1999年以降2010年まで、おおむね1,600～1,800トンの間を比較的安定して推移していたが、2011、2012年と連続して減少した。天然1歳魚加入尾数は150万～290万尾の間を変動しており、明瞭な再生産関係は認められなかった。資源量4,300トン以上を高位、2,900トン未満を低位として、2013年の資源水準は低位と判断した。また直近5年間の資源量、漁獲量の動向から資源動向は横ばいと判断した。





管理方策

資源水準の低位と中位の境界となっている資源量2,900トン、資源量データの蓄積によるBlimitの設定が可能となるまでの当面のBlimitとした。ABC算定のための基本規則1-1)-(2)を使用した。本系群の資源量はBlimitを下回る状態であるため、漁獲圧の低減によって5年後に資源量を中位水準に回復させることを管理目標として、これを達成するF (Frec) による漁獲量をABClimitとした。また不確実性を考慮して安全率に標準値0.8を採用し、0.8Frecによる漁獲量をABCtargetとした。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	750トン	Frec	0.51	36%
ABCtarget	630トン	0.8Frec	0.41	30%

- ABC算定規則1-1)-(2)を使用
- ABCは1トンの位を四捨五入
- F値は2歳の漁獲係数
- 漁獲割合はABC／資源量

資源評価のまとめ

- 資源量は2007年以降減少傾向にあったが、2013年は2012年よりやや増加して2,214トンと推定された
- 資源水準は低位、動向は横ばいである
- 加入資源の有効利用の観点からも、親魚資源の確保の観点からも、現状の漁獲圧は高いと判断される

管理方策のまとめ

- 資源量はBlimitを下回る状態であり、低位水準にある資源の中位水準への回復が重要である
- 漁獲圧の低減によって5年後に資源量を中位水準に回復させることを管理目標とする
- 全長制限(現在20～35cm)効果の検証及び規制サイズの見直しや、適切な再放流方法の確立等が必要である

執筆者: 上原伸二・井関智明・八木佑太

資源評価は毎年更新されます。